



Title	Prevalence of Social Isolation in Community-Dwelling Elderly by Differences in Household Composition and Related Factors : From a Social Network Perspective in Urban Japan(内容・審査結果要旨)
Author(s)	島田, 今日子
Citation	
Issue Date	2014-03-25
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/609
Rights	This is the original submission of the following article: Shimada K et al. Prevalence of Social Isolation in Community-Dwelling Elderly by Differences in Household Composition and Related Factors: From a Social Network Perspective in Urban Japan. J Aging Health. 2014 Aug;26(5):807-823. © 2014 SAGE Publications. doi: 10.1177/0898264314531616
DOI	
Text Version	ETD

論文内容要旨

しめい 氏名	しまだ きょうこ 島田 今日子
学位論文題名	Prevalence of Social Isolation in Community-Dwelling Elderly by Differences in Household Composition and Related Factors: From a Social Network Perspective in Urban Japan 地域在住高齢者の世帯構成別による社会的孤立の出現率と関連する要因の検討—日本の都心部におけるソーシャル・ネットワークの視点から—
<p>【目的】 高齢者における社会的孤立は先進国の問題であり、日本では独居者と同居家族のいる高齢者の場合に、同居家族以外の者との接触頻度を測定して社会的孤立が検討されている。本研究では従来検討されていなかった家族と同居する者の社会的孤立も含めて、独居と同居の地域在住高齢者の社会的孤立の出現率を求め、関連要因を検討した。</p> <p>【方法】 対象者は都心部に在住する65-84歳の2000人で、分析では1013人を用いた。社会的孤立はLubben Social Network Scale-6を用い、他の変数は性別、年齢、世帯構成、要介護認定の有無、日本語版WHO-5精神健康状態表、健康度自己評価、モーター・フィットネス・スケール、老研式活動能力指標、基本チェックリストの認知症3項目、身長、体重、生活習慣7項目、慢性疾患の有無、外出頻度、同居家族以外からの支援、等だった。独居と同居の世帯別に社会的孤立の出現率を求め、世帯別に社会的孤立と各要因について2変量分析を行った。社会的孤立と有意に関連の認められた要因を説明変数、社会的孤立の有無を目的変数、性別、年齢を調整変数として多重ロジスティック回帰分析を実施した。</p> <p>【結果】 社会的孤立の出現率は独居31.0%、同居24.1%だった。社会的孤立に関連した要因は、独居と同居において精神的健康状態が低いこと（得点が1点下降するにつれ；独居：OR=1.09 [0.92の逆数] 95% CI 0.86-0.98、同居：OR=1.08 [0.93の逆数] 95% CI 0.88-0.98）、同居家族以外からの支援が低いこと（得点が1点下降するにつれ；独居：OR=1.50 [0.67の逆数] 95% CI 0.56-0.80、同居：OR=1.50 [0.67の逆数] 95% CI 0.60-0.75）だった。同居にのみ社会的孤立に関連した要因は、知的能動性が低いこと（得点が1点下降するにつれ；OR=1.46 [0.69の逆数] 95% CI 0.52-0.91）、不健康な生活習慣（得点が1点下降するにつれ；OR=1.28 [0.78の逆数] 95% CI 0.63-0.98）であった。</p> <p>【考察】 社会的孤立の出現率は独居、同居ともに欧米の値よりも高いことが明らかになった。社会的孤立に関連した要因は、独居と同居において精神的健康の不良、同居家族以外からの支援の少なさで、同居にのみ社会的孤立に関連した要因は、知的能動性の低さ、不健康な生活習慣だった。社会的孤立の予防にむけて、世帯状況に関わらず、精神健康の維持・増進、友人づくりにつながるような活動の支援が重要であり、同居では家族を含めて、知的能動性の維持と活動の推奨、望ましい生活習慣に関する情報提供といった支援の必要性が示唆される。</p>	

別紙 2

学位論文審査結果報告書

平成 26 年 1 月 14 日

大学院医学研究科長様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

【審査結果要旨】

氏名 島田 今日子

学位論文題名

Prevalence of Social Isolation in Community-Dwelling Elderly by Differences in Household Composition and Related Factors: From a Social Network Perspective in Urban Japan

地域在住高齢者の世帯構成別による社会的孤立の出現率と関連する要因の検討
—日本の都心部におけるソーシャル・ネットワークの視点から—

高齢者における社会的孤立は認知症、循環器疾患の発症および死亡のリスクであり、超高齢社会を迎えた我が国において重要な課題の一つである。これまでの研究により、社会的孤立の要因が検討されてきたが、近年、独居だけでなく家族と同居する者においても社会的孤立が問題となってきた。しかしながら、家族と同居する者における社会的孤立の要因については殆ど研究されていない。

島田氏はこの点に着目し、都市部の地域在住高齢者における社会的孤立の頻度を独居と家族と同居別に調べるとともに、その関連要因を検討した。65-84歳の都市部在住高齢者 2,000 人を対象として、郵送法により Lubben Social Network Scale-6 を用いて社会的孤立を評価し、身体心理社会的因子との関連を多重ロジスティック回帰分析によって検討した。有効回答が得られた 1,013 人を解析した結果、社会的孤立の出現率は独居 31.0%、同居 24.1%だった。独居、同居ともに社会的孤立に関連した要因は、精神的健康状態が低いこと、同居家族以外からの支援が低いことだった。また、同居にのみで社会的孤立に関連した要因は、知的能動性が低いこと、不健康な生活習慣であった。一方、独居のみで社会的孤立に関連した要因は同定されなかった。本研究の結果、独居のみならず家族と同居している高齢者の中にも社会的孤立状態と判断されるものが 24%以上おり、独居高齢者と異なる要因が関連していることが明らかになった。

独居、同居高齢者双方で社会的孤立と関連した社会的支援が低いこと、同居で関連した知的能動性、生活習慣は介入可能な因子であることから、本研究では家

族と同居している高齢者の社会的孤立に関連する要因について新しい知見を報告しただけでなく、結果が社会的孤立の予防対策に応用可能であり、公衆衛生的意義が大きい研究である。

したがって、本論又は学位を授与するに十分に価するものと認める。

論文審査委員	主査	大平	哲也
	副査	早川	岳人
	副査	佐藤	薫